ダンジョンコンビニ　デッドライン　魔王城《ラスダン》店にようこそ！

上屋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ダンジョンコンビニ　デッドライン　魔王城（ラスダン）店にようこそ！

【Ｎコード】
Ｎ５７４３Ｕ

【作者名】
上屋

【あらすじ】
広大に広がる魔王城地下ダンジョン、そこには一軒のコンビニが、今日も元気に営業している。
「やあやあ、よくぞご来店くださいましたお客様！　コンビニエンスストアのデッドライン、魔王城（ラスダンジョン）店へ！
当店では日用雑貨から、お弁当、ドリンク、スイーツ、毒物、トラップ用建材など豊富な品揃えでいつでもお客様のお役に立てるように日々努力しておりまス！

ちょっとしたことでも気になさらずお声かけ下さイ。我が店の従業員がお客様のために全力で解決いたしまス。
コンビニデッドライン！　コンビニデッドラインをどうかよろしくお願いしまス！
……あ、店員に喧嘩売るのだけは止めて下さいネ？　物を売るのはウチの方の専門ですカラ」

「店長ぉ、何やってんすか？　手が足りないんで早くレジやって下さいよ！」

「ああ、ジム君ちょっと待っててヨ！」

深夜の日常（前書き）

ほそぼそと、書いていこうと思います。

深夜の日常

黒一色、夜の彩を映す窓には俺の顔が映っていた。
ふち無しのメガネ、目元を隠すまで伸びたボサボサ気味の黒髪、特徴の無い若者の顔、それもとびきりの退屈に浸りきった表情だ。反転して映る「ジム・スミス」の名札の心なしかくたびれて見える。
無理もない。夜勤、深夜のコンビニのバイトなんぞこんなもんだ。時給に釣られて来てみれば、ずいぶんと立地に面食らったが、慣れてみればどうということは無い。
魔王城、俗に言われるラストダンジョン内といっても馴染んでしまえばこんなもの。
深夜の店内では四人ほどの客がいるのみ。さっきから四時間くらい入り浸っている完璧に時間潰しにきた馴染みの客だ。

――ん？　あれは……

ピコーン

「あ、いらっしゃぁせぇ」

来客用のブザーに体が反応、俺はもはや反射動作になった挨拶を力無く告げた。

「……」

まるで財布でも落としたかのような仏頂面のまま、見慣れた客がづかづかと店を歩く。見た目は二十代半ばほどの年齢。輝きを放つ紫の長髪と高い身長、黒い隈取りが映える目元、朴念仁と笑われる俺でも最初見た時は思わず黙ってしまったほどのシャープかつダー

クな雰囲気を纏う美しい女性だ。冷たい眼から放たれる視線は鋭角な殺気を放つ。
全身にはやたら有機的なラインを描く尖ったデザインの紫色の鎧をまとっていた。なにか夜中にかたかた動きそうでいやなデザイン。肩からは固まる寸前の血のようなクリムゾンレッドのマントが風も無いのに緩やかに揺れている。
客の歩みは入ってからすぐに右へ曲がった。俺のいるレジの反対側、雑誌コーナーへ向かっていく。づかづかと、そりゃあもうづかづかと。
――……あー、またかよ。

そしてそこでヤングジャンプを立ち読み――というか袋閉じを歪めて斜めから見ようとしている――二人組の内の一人のすぐそばへ進んでいく。
目標の一人、中肉中背の若い男は豪奢な鎧を纏っていた。背に背負うは神々しい大剣。いわゆる広場とかに刺さってそうな礼のブツな感じ。
袋閉じを斜め見しようとするその眼は、冷徹で、残酷で、何よりも必死だった。恐らくいかなる強敵を相手にした時も、この男はこんな眼はしていないだろう。
――あいつ、きっと本気で人殺す時はあんな眼をするんだろうなぁ。そんなにみたいのか表紙の見出しの『女僧侶の秘密の悩殺タイツ』

「――――おいッ！なにやってんだよ！」

「おうふッ！！」

入ってきた紫髪の美女――というか魔王――が、命掛けの形相で袋閉じを盗み見しようとしていた二十代の男――このアレなのが勇者――に怒号を飛ばす。驚きでビクリと身を震わせる勇者。めちゃ

くちゃキョドってる。これが人類の希望かと思うと人類滅んでもいいかなと思えてきた。

「なにお前、ラストダンジョンで「コンビニ行ってくる」って！？
勇者業舐めてんの！？」

額に青筋を立てて怒鳴り出す魔王。ちょっと涙眼なのは、かなり待たされたからなんだろうか。

「しょうがないだろ！　きょうヤンジャンとチャンピオンの発売日だったんだから！」

もはや言い訳どころか大人としてアレなレベルの腐れ言を吐き始める勇者。つうか驚いた時に袋閉じが少し破けている。後で買い取らせよう。死なないかなぁコイツ。

「ラストバトルの途中でコンビニによるわ、オマケに四時間以上帰らないわ、お前ら勇者やる気あんの！？　無いなら帰っていいんだよ！　待たしてる配下のモンスターの時給ももったいないんだから！」

いや結局帰すのかよ。ていうか配下のモンスターは時給制だったのか。

「色々あるんだよ、回復剤切れたし、小腹すいたし、ＭＰ無いし」

そこはラスダン前なんだから備えとけ。というか覚悟しとけよ。

「やっぱ勇者業舐めてんだろお前！　大体……、あ、ちょっと、おい！　店員！　店員！」

長髪をなびかせ、魔王が振り返る。端正な顔に渋い表情を浮かべながら、俺を手招きして呼び寄せた。この人大人しく振る舞えばただの美人なんだけどなぁ。

「はぁ、なんすか？」

仕方無く近くへよっていく。なんかまためんどくさそうだな。

「さっきステータス確認したら、コイツらＭＰ回復してるじゃないか！？　ＭＰ回復剤は販売禁止ってこの店出す時の条件で決まってたはずだぞ！」

あー、そういえば出店の際は魔王側と色々契約条件を付けたって店長がいってたっけ。

「ああ、ＭＰ回復剤は禁止ですけど、ヒールスポットは契約に入ってないんで、有料のやつがあるんですよ」

一瞬、魔王の顔が呆ける。この人見た目はスパルタンなのにどこかヌけてんだよなぁ。

「はぁッ！？　そんな抜け道あったのか！？」

「ええ、店長がそれはＯＫだっていってました。まあ俺はバイトなんでよくわかんないんですけど」

「店長だ！　店長呼んでこい！　私は断固抗議するぞ！」

バタバタと手を振りながら取り乱す。涙眼がより強まった。少しは落ち着け最高責任者。

「店長は転職神殿と業務提携の相談をするために、二週間ほど出張中です」

「……転職神殿？　何の業務提携だ？」

「なんでも新職業『コンビニ店員』を造るそうで。一応習熟度のクラス名が『暗黒のブラック店員』とか『絶望の廃棄弁当処理係り』とか『愛と悲しみの誤発注』とかまでは決まってるらしいですが」

「……お前んとこの店長はいったいどこを目指してるんだ？」

知るか、俺が聞きたい。

「とにかく！　条件の変更だ！　ヒールスポットも禁止にするぞ」

腰に手を当て、胸を張り宣言をする魔王。鎧越しでも豊満な胸の形がわかる。少しは威厳を出そうとしているようだ。

「たしか条件の改正は二年ごと、あと一年は無理ですね」

「ああ！　もう！」

苛立った声を上げ、頭を抱えてイヤイヤと振り出す。この人行動が一々子供っぽいよ。

「ふはははは！　自業自得だな魔王！　それもこれもコンビニのエロ雑誌にヒモをかけるという非道な行いの報いだ！」

急に元気になる勇者、コイツほんと死なないかなぁ。全体攻撃使

えないまま大量のスライムに削り殺されればいいのに。
「勇者さん、今雑誌の影に隠したヤンジャン、袋閉じ部分が破れてましたから買取お願いします」
「え、いやあの、ごめんなさい買い取ります」
最初から読まずに買えよ。
「うちの配下のモンスターは未成年もいるんだ、そんな雑誌ヒモ縛りなしで売れるわけないだろ。こないだだって新入りのモンスターに『魔王様、あの縛ってある本は何の本なんですか？　内容教えて下さい』と聞かれて答えるのきつかったんだぞ」
頬を赤らめる魔王。いや、魔王さん、それ質問ぽいただのセクハラだから。
「中身を調べなかったら立ち読み……じゃない、買うかどうか判断つかないだろ！　中身さえ見えれば、はっ、そうか！　おい！　盗賊！」
勇者の呼びかけにカップラーメンのコーナーからひょろ長い人影が歩いてきた。
「何だ？　俺は今新発売のチョコサワークリームきしめんと梅ジャム焼きそばのどちらにするか熟考中なんだが」
皮鎧の痩身の男――カップラーメンマニアの盗賊――が口を開いた。それ試食したけどどっちもハズレだぞ。

「トレジャーサーチをこの本に使うんだ！　そして内容を教えろ！」

トレジャーサーチ、盗賊のスキルで宝箱など、密閉物の中身を探る能力だ。このアホ勇者、小学生辺りが五分で思いつくが、それでもなお踏みとどまることを平気でやりやがる。そこにシビれず憧れず、武器買ったけど装備忘れたとか最高にアホな理由で死ねばいいのに。

「仕方ないな、……任せろ」

身構えた。やるつもりらしい。コイツもアホか。

「これを頼む！」

勇者の出した本は「団地妻僧侶、昼下がりのお祈り」お前どんだけ僧侶好きなんだよ。

「ぬぅんッッ！……、こ、これは！」

「ッッ！　どうした盗賊！」

蒼白な顔で尋ねる勇者。お前戦闘中仲間がやられそうでもそんな顔しないだろ？

「なんてこった！　勇者、この本は……スゴくエロい」

「なん……だと……？　じゃ、じゃあこっちのエロ本は！？」

今度勇者がだした本は「女僧侶が信仰ぶん投げる時」……なんでうちのコンビニは女僧侶の本が充実してるんだ？　ひょっとして僧職系女子が今ブームなのか？

「ぬぅんッッ！……これは、凄まじくエロい！」

「な、なんだってぇッッ！　せ、せめて内容を教えてくれ！」

「言葉を出来ないほど……エロい！」

バカだ。ミドリムシのほうが英知と教養溢れる種族に見えるほどバカだこいつら。

「あの、お客さん。今、夜遅いですし、他のお客様の迷惑になりますから静かにしてください」

俺の隣では、魔王さんがドン引き&ウジ虫を見る眼で二人を観察していた。意外と潔癖だな魔王さん。

「あ、いえ、すいません」

「あ、ごめんなさい」

一瞬で素に戻る二人、深夜のテンションの力なんてこんなもんだ。お前ら基本地味な人間なんだからそれらしくしてろよ。

「あぁ、店員さん、ちょっといいかな？」

低い声が聞こえた。勇者の隣で黙って立ち読みをしていた重厚な鎧に顔まで包まれた斧を担ぐ巨漢――戦士だ――が口を開いたのだ。つうか立ち読みしてた本が「ラスダン近くの宿屋主人が教える財テク必勝術」　……戦士でも税金対策とかすんのか？

「『ラヴラヴ☆ベギラマたん』第十刊と『プリティー神官ペドフィーの毎日』第三刊はここには入荷していないのかな？」

……えーとその題名のマンガはたしか。

「すいません、うちじゃ入荷してない……」

「おい、そのマンガはこのコンビニどころか魔王国内ではおいてないぞ」

俺の言葉を遮って魔王さんが喋る。あ、ひょっとしていうつもりですか？

「魔王城に余りに公許良俗に反する全年齢向けロリペドマンガだから、規制してくれと市民から苦情があってな。試しに我が輩も読んでみたが、噂に違わぬヘンタイぶりだったので速攻で『魔王条例禁止図書』に登録した。いい年した大人があんなものを読むなど恥をしれ恥を！」

ああ、言っちゃったよこの人、いや魔王。たしかに話聞いて読んでみたら俺も引くらいだったけどさ。しばしの沈黙ののち、戦士が口を開いた。

「――――己が信条を貫き通し生きることに後悔は無い。……ロリペドは、恥ではない、生き様だ」

いや恥だよ全力で恥だよ。せめて隠そうよ、だれにも見えないようにしようよ。

「なっ！　痴れ者が！　一体お前ら勇者一味は何を考えて……」

「なー、そんなこというけどよう」

さらにドン引きする魔王さんに勇者が口を挟んだ。

「魔王だってこないだキワドイ内容のＢＬレディコミ立ち読みしてたじゃん」

それ俺も見たことあるわ。

「……ていッ！」

魔王さんのチョップが勇者の顔に炸裂、ペチりと音を立てた。魔王さんはすでに耳まで真っ赤だった。

コンビニ内では豊富な魔力や体力を誇る魔族の強盗や乱闘防止のため、攻撃魔法完全無効化、物理攻撃力９９．９％ＯＦＦの結界がかかっている。そのため例え魔族の王たる魔王でも、店内で振るえる暴力はあのへなちょこチョップしかない。

……こんな結界仕掛けるとかいったいうちの店長は何もんだよ？

「誰が！」

ペチリ、と勇者の額が音を立てて叩かれる。

「ＢＬレディコミの！」

ペチリ、と勇者の鼻がちょっと歪んだ。

「ドライな商人のヘタレ受けを読んだってぇ！？」

いや完璧読んでんだろ魔王さん。内容知ってるし。

「ちょっとぉー！　店員さんいるのー！」

「あ、はぁーい！　今行きまーす！」

レジから高い女性の声が聞こえる。ペチペチとチョップ合戦を繰り広げる魔王さんと勇者をほおって、レジへ戻るとするか。

「……だからさぁー、ないのアレ？」

「申し訳ないんですがないんですよ」

レジの前で、年齢は二十代ほど、杖を携え、赤いローブと特徴的な幅広の尖り帽子をかぶった気怠げな女性――魔術師だ――が眉根を寄せていた。……それなりにかわいいんだからそういう表情はしないほうがいいんじゃない？

「だからさぁー、チェーンソー無いの？　最近流行りらしいから欲しいんだけど」

ねぇよ。コンビニが扱うわけねぇだろ。つうかその流行りはちょっと遅れてるよ。

「いやうちの店は条件で武器は取り扱えないんですよ」

「武器じゃないわよ。日曜大工の工具よ。大体さぁー、この店だって強盗用の自衛武器あるんでしょ？　それを棚にあげて……」

「武器はありませんよ。自衛の道具はこの常に後ろに置いてあるモップだけですよ」

少なくとも、俺がシフトでいるうちは武器などいらない。

「……さっきからそのモップやたら輝いてて気になるんだけど何製？」

俺の後ろでは金属製モップの柄が鈍く輝いている。

「はぁ、店長の話ではレアメタルのオリハルコン製っていってましたよ。せめてもの自衛になればと店長が造らしたそうですが」

魔術師の顔がヒクついた。

「純オリハルコン製ならうちのアホ勇者の剣より上の武装じゃない！　あんたの所の店長は何もんなのよ！」

知るか、あの妖怪の正体など知りたくもない。

「前々から思ってたけどこのコンビニって変よ、立地もアレだけどいつ来てもスイーツのティラミスとかシュークリームとか売り切れてんのはなんでよ？」

「この店出す時の条件で、ティラミスとシュークリームは注文できる限界まで全部魔王さんに献上ってことになってるんですよ」

またも魔術師の顔がヒクつく。杖を折りそうなほど握りしめている。雑誌コーナーで未だはたきあっている勇者と魔王さんを睨む。

「立場思いっきり利用してるわねぇ、あのアマ……」

「城のコックはお菓子作れないし、もうトカゲステーキとか食べたくないってかなり喜んでるんですけどねぇ。ただそろそろ他のお客さんからティラミスを食いたいって苦情が……」

巨漢のオークや強面のオーガから「スイーツを喰わせろ」と詰め寄られる経験はもう二度としたくない。

ピコーン

「あ、いらっしゃ……」

ぬっとした影、のそりとした歩行。一瞬、言葉に詰まる。魔術師がそそくさと店の奥へ逃げていく。

「おい、今はあの娘はいねぇのか？」

見上げるほどの上背、太いを通り越し丸い体、黒々とした体毛に、

申し訳程度のコウモリの羽。牙の目立つコワモテの顔のサイドには、捻れたヤギの角がついていた。

「お客さん、今は深夜、あの娘のシフトは昼ですよ。第一、酒に酔って入店は止めてくださいませんか？」

精一杯の作り笑顔。出来うる限りの愛想を振りまきながら、お暇を願うが、……多分いうことときかねぇだろうな。酔っるし。

このクソお客――ド腐れグレーターデーモンという種族のゴミオヤジ――は昼間働いているバイトの娘――半魔族の十六才――になにかとちょっかいだして店長から出禁喰らったロクデナシの客だ。

この魔族の国じゃ昔は人間の血が入った半魔族は被差別種族だったそうで、――最もあの魔王さんが継いでからは差別は全撤廃路線になったそうだが――大体のお客さんはまったく気にしないんだが、たまにこのド阿呆みたくいじりだすやつがいるらしい。

大方、店長が出張と聞きつけて酒の勢いできたのだろう。……店長のヤロウ、出禁にすんならしっかり脅し入れとけよ。

「あ”あッ？　いないんなら呼んでこいよ、俺は客だぞ！」

「勘弁してくださいよお客さん。今は深夜ですよ」

ゲフリと息を吐くオッサン、クソ、やっぱり酒くせぇ。

「おい、なんでこの店は酒置いてねぇんだ！？」

「魔王さんとの条件で酒類は置かないと決まってるんですよ」

「だったらお前が買ってこい！　俺は客だ……」

「何をやっとるかこのバカ者がッッ！！」

かん高い怒声、空気が激しく振動する。覇気を漲らせた美貌の魔人が立っていた。魔王さんがオッサンを一括したのだ。しかし、

「ああっ！？　どうやって魔王継いだかも怪しいヤツが何いってやがる。オレに指図すんじゃねぇっ！」

レジ横の商品をぶちまけ、かまわず怒鳴り出すオッサン。こいつ酒の勢いでわけわかんなくなってるな。

魔王さんがなんか近くでわたわたしてるが、結界で攻撃能力が弱められても体重は変わらないので、今の魔王さんの腕力ではこの質量だけは巨大なオッサンを店外へ排除は出来ないのだろう。……役たたねぇ、最高責任者。

「大体この店は前から気にくわねぇんだ！　店長は不気味だし、この野郎は愛想ねぇし！」

店長が不気味なのは同意だ。俺の場合愛想を最大限売ってこれだ。しょうがねぇだろ。

「あの半魔族のチビ娘だって、マジメぶっても裏じゃ客でも取ってんじゃねぇのか！？」

……オイッ

「オイ、あんちゃん、あんたも案外あの娘の客だったり……」

「勇者さん、入り口のドア全開にしてもらえません？」

オッサンの真後ろ、出入り口からこっそり逃げようとする勇者に声をかける。……こいつほんとに勇者か？

「あ、ああ、わかった店員さん！」

勇者が出入り口の両扉を全開にしたのを確認。ドアの外にはダンジョンの闇が広がっていた。

「お客さん……」

「――あっ？！」

オッサンの前に立ち、遠目の視線。真っ直ぐに出入り口とオッサンが重なるのを確認、足を広げ腰を静かに落とす。

「店長や店とか俺の悪口は別にいいんですが」

ゆっくりと息を吐き、呼吸を整える。丹田から上る「気」を脳内でイメージ、丹念に静かに「気」を練り上げていく。気を練ることと放つこと、このイメージをどれだけできるかが俺の持つ技術の背骨だ。そっと、緩く握った右拳をオッサンの腹の前、三センチほど離して置く。オッサンの推定体重は二百キロほど。ナマった俺でもまだイケるはず。

「従業員、特に女の子の下品な悪口は止めてもらえませんか、この××××野郎」

昼間だったら言えない最高峰の罵倒。言った俺さえ口を思わずゆすぎたくレベル。もちろん、

「――――ッこの、テメェッ！」

この単細胞に効果はバツグンだ。

「セイッ！！」

飛びかかるオッサンへ、気合いとともに踏み込み。大地を蹴り、練り上げた気を拳から爆発させるイメージを解き放つ。確実な、真芯を貫いた甘く懐かしい感覚。拳に走る焦熱。

次の瞬間、オッサンの体は弾けるように後ろへ吹っ飛ぶ。

「うろおおぉぉぉッッ？！」

豚のような悲鳴を上げ、三メートル程飛ぶ。そのままゴロゴロと転がり、出入り口を出て、店から五メートル離れた所でオッサンは停止した。

ま、加減してあんなもんか。

今のは寸剄、俺の打てる中では最小の距離で放てる中で最強の打撃技だ。……もっと飛ぶとおもったんだがなぁ、やっぱりナマってらぁ。

「ん？」

ふと見ると魔王さんが呆然と俺を見ていた。

「……店員君、君、武道家だったんだ？」

「ええ、食えなくて今じゃコンビニ店員ですけどね。――あ、あのおっさん店外なんであとお願いしていいスか？」

「へ？　あ、ああ、わかった。後は我が輩がやろう！」

魔王さんが店外――つまり結界範囲外――を一歩出た直後、倒れるオッサンめがけ特大のファイヤーボウルが炸裂した。……ありゃ、全治半年ぐらいかな。

さて、と。

しみじみと自分の名札を見つめる。あらゆる存在が弱体化するコンビニ――デッドライン、ラスダン支店――において例外はもちろん存在する。

店員の証たる名札を持つ者のみが結界の影響を受けつけないのだ。

「どぉれ、品物並べ直すか……？」

店の出入り口でデカい雑巾――否、オッサンの回転に巻き込まれて倒れている勇者を発見。

ま、生きているみたいだからいいか。

今夜も退屈だなぁ。

深夜の日常（後書き）

次回はバイトの女の子が出てくる予定……です。

午後七時の日常（前書き）

お待たせしました。
なんか思ったよりも好評で驚きました。
正直、ストックが少なく文を書くのも遅いので、待たせるかもしれませんがよろしくお願いします。

午後七時の日常

ピコーン

「あぁりがとうございましたぁー」

「ましたぁー」

去ってゆくオーク族のお客の広い背中を見送りながら、反射的に発したあいさつが重なる。

時刻は午後七時、日勤が終わった魔王城のラスダン勤務の魔族が、帰り際に買い物に来る夕方の繁盛期も今日は珍しく早めに終わった。

店の外は深夜の時と相変わらず真っ暗だ。まあ、ダンジョン内だから当たり前なんだが。そもそも、ラストダンジョンは構造上は魔王城の真下の地下にある、というより魔王城が広大なラストダンジョンの上に建てられたという方が正しい。

かつて存在した、今なお持って正体不明な超文明保有古代種族、通称『前方を外れた者（アウトフロント）』

彼らが作ったとされる世界に数ヶ所存在する無尽蔵かつランダムな資源と増殖構造を持つダンジョンも、徐々にその機能の低下を示し五十年程前から大体が機能を停止していった。

その中で、南方の蛮族と言われた魔王国、その魔王一族が管理しているダンジョンが、今なおその働きを維持している。

現在の超重量子魔術炉を中心設計とするダンジョンの全てはアウトフロントの管理していた頃より暴走状態にあり、構造も意味不明

かつ、非常に危険な場所となり果てている。

しかし、人の欲望はしぶとくたくましく元気よく。

ダンジョンを探索し、生成されたレアメタル等を持ち帰る「冒険者」と呼ばれる職業が現れることにより、ダンジョンは一躍、一攫千金の戦場となり時代をつくる事になった。

しかしそれも先程言った機能低下により、ダンジョンは次々と封印、または枯渇を恐れ、保有する国のみが探索出来る場所が増えていく。

自由人たる冒険者には凍える冬の時代の到来だ。

ただその中で、この魔王城地下ダンジョンのみが古くからのダンジョンの在り方、即ち、

『力を示し、試練を乗り越え、相応しき代価を獲る血の鍛錬の場』

としての方針を変えなかった。

それ故にこの魔王城地下ダンジョンには多くの冒険者達が群がることとなる。

そして彼らは此処をこう呼ぶ。失われゆく中、唯一残る正真正銘のダンジョン。冒険者達の最後の楽園。

『ラストダンジョン』と

とはいっても世の中そう美味い話ばかりではなく、魔王城独自の――というかかなり魔王国本位な――ルールがあったりするわけだが。

ま、人間冒険者なんてヤクザな商売じゃなくて、地に足つけた商売やったほうがいいんだよ。例えばコンビニ店員とか。

「あ、もう七時だね、リド、そろそろあがんなよ。弟達が待ってるんだろ？」

俺の傍らで先程一緒に客を見送ったバイトの女の子――リド・ベイカー、半魔族の十六才――に声をかける。

「あ、はい！　じゃああがりますね」

薄い褐色の肌、半魔族特有の、人間との混血の証しである緩やかに、少し尖った耳と後ろでにまとめられた黒髪。俺より頭一つ低い百五十前後の身長を構成する、成長途中の少女特有の薄い胸と細い手足。

コロコロとめまぐるしく、活発な表情と明るさ、そして大きく開かれた若者らしい汚れのないグリーンの瞳が印象に残る少女だ。……こういう眼を見る度に、自分の眼が薄汚れていることを自覚するんだよなぁ。

「あ、あとさ、今日も廃棄弁当あるんだけどもっていきなよ。弟さん達、結構食べるんだろ？」

売れ残りの廃棄弁当を持って帰るのは建て前は禁止だが、正直それほど守られてはいない。食い物無駄にするのは色々申し訳ないし。

「ありがとうございます、ジムさん！　弟達も喜びます」

渡された弁当入りの袋を受け取り、リドが微笑む。まるで花が咲くような自然な笑み。
リドは余り、というかかなり家が裕福ではない。加えて父親がいない家庭だ。元被差別種族は大体が貧困層にある。
平日は学校に行き、五時から七時まではデッドラインでバイト。その後は兄弟達の世話。休日はほぼコンビニでバイト三昧。若者らしく遊ぶヒマはないだろう。

三ヶ月前、魔王さんの紹介で、初めてうちの来た時の彼女はひどくおどおどとした、今にも泣きそうな少女だった。
その萎縮した態度の原因が、元被差別種族として周りからなじられた経験からだと知った時は、俺のようなすれた人間でも彼女をなじった身も知らぬ誰かへ胃液がこみ上げるむかつきを覚えたものだ。
しかし、根が明るいの娘なのだろう、だんだんと打ち解けて、その性格の陽の部分を見せていくリドを見る度に俺は胸をなで下ろす。
――……なんだ、まだ俺も多少人間らしく振る舞える部分があったのか。

「じゃあ、お疲れ様でしたジムさん」

「ああ、お疲れさん、リドまた明日……ん？」

視界が急に暗くなる。店の電灯がいっせいに消えたのだ。

「キャッ！　ジ、ジムさん！？」

リドが思わず俺にしがみつく。……リドしがみつくのはいいけど、襟引っ張んないで、制服伸びちゃうから。

「リド、落ち着け。この店でこういうこと仕掛けてくるのは十中八九……」

そう、冒険者の戦闘に巻き込まれても耐えられるよう、魔術、物理両面で超強度の設計とサバイバリティが確保されたデッドラインでこんなことを仕掛けられるのはただ一人。

「ただぁぁいまぁぁッ！」

シャウトととも極太のスポットライトがレジ前を照らし出す。……おい、この店にこんな設備あったのか？。

輝く光の場には、ポーズを決める人影。

身に纏うは漆黒、スラックスのスーツ、胸元は大きく裂け、形の良い豊満な乳房の谷間どころか、へそまで覗く。スラリと伸びた背丈は百七十後半ほど。砂時計を連想させる見事なプロポーションには長く引き締まった四肢が連なる。

腰まで伸びるブロンドの長髪にスーツと対を成す純白の紳士帽が乗っていた。朱く紅を刺された唇が艶めかしい。

そしてもっとも眼を引く特徴、その顔上半分を覆っている仮面。

幾何学的紋様で形作られる、キツネを模した仮面だ。

そう、この一応は二十代後半らしき、女性――らしきものが、

「いっやぁぁー、ご無沙汰！」

その手に握られていたのは煌めく長い棒。というか、あれはオリハルコン製モップ。後ろを振り向くとやはりモップはすでにない。アイツいつの間に取りやがった。

モップの柄をつかみながら、華麗にステップを刻む。やがてその動きが艶めかしく、扇情的な動きに変わった。

――ていうかアレポールダンスじゃねぇか……

艶めかしい腰の動き、肢体を見せつけるような舞。クルリと棒を一回しさせ、足と足の間に挟みながら、最後のポージングを取った。

「……す、」

呆然と見ていたリドが、不意に言葉をつぶやく。

――そうこれが、

「すごいです店長！　すごいかっこよかったです！　やっぱり店長っていろんなことができないとなれないんですね！」

リドの眼に嘘はなかった。純粋さ百パーセントの憧れの視線だ。

リド、そっちにいくな、戻れ、戻ってくれ、頼むから。

――これがうちの、ラスダン支店の店長だ。

「もぉぉう、あぁりがとウ！　オウプリティーガールッ！　ベリープリティーガールッ！」

モップを放り投げ、リドへ脱兎の勢いで飛びかかる店長。

「あ、おかえりなひゃ、ムグッ」

そのままリドの頭を豊満な胸で熱く抱きしめる。

「出張中寂しかったヨ！　リドかわいいよリド！　リド可愛すぎて生きるのが辛イ！　さあ私にロリコニンを吸収させテ！　ロリコニン吸収ゥゥゥッ！」

なんだロリコニンって。そんな物質あるか。リドが乳に圧迫されて呼吸できなくなってるぞ。

「……店長、ずいぶん早く出張終わったんすね」

たしか帰るまであと四日あるはずだ。

「おお、ジム君！　元気にしてタ！？　そうだジムニウムも補給しないト、ジムニウムゥゥゥ！」

「触るな」

リドを離して向かってくる店長、おれはとっさに店長の頭を掴んで抑える。店長のジタバタと動く手が空を泳ぐ。

「触るな抱きつくな頬ずりするな！　ついでにジムニウムなんて物質は存在しねぇ！」

「オウ、ジム君ツンなノ！？　ツン時期なノ！？　デレ期が来たら教えてネ！」

デレ期なんぞねぇよバカ。

「で、なんで早く帰ってきたんですか？」

リドを帰した後、客がいなくなった店で、俺は店長に問いかける。正直な話、なぜ戻ってきたか検討はついているが。

「んー、ジム君わかってて聞いてるでショ？　……この間ジム君が起こしたお客様追い出し事件ですヨ」

店長のふざけた口調が急に正される。……やはりそれか。

「魔王さんから事情聞いて、慌て向こうで話まとめて帰ってきたんでス。ジム君、お客様に暴力を振るうのはいかなる場合にも許されません。わかっていますネ？」

「……ええ、わかってますよ」

「ジム君、私があなたをこの店に呼んだのは、素手による強力な戦闘力を持つことが第一の理由でス。
結界が効いた店内でも、冒険者のいざこざはありまス。しかし、店員が武装するわけにはいきません。お客様に無用な圧迫を与えるわけにはいけないからでス。この店は安らげる場所でなくてはいけないんですからラ。
それ故に、拳士として素手で戦場を生き抜いてきた君をこの店に呼んだんですヨ」

思い出す、七ヶ月前、俺は戦場でこのキツネ面に出くわした。

「……別に、辞めろというなら辞めますよ」

正直、あのオッサンを殴り飛ばしたことに後悔はなかった。
フゥっと大きく、店長が嘆息する。
「私がいいたいのそういう事ではありませン。君が軽々しい行動をすると色々な人を悲しませるのですヨ。何よりも私が悲しイ」
「……」
どうにも言葉が出ない。所詮俺は自分のこと以外には責任のとれない人間だ。
「まぁ、あのオッサンは出禁ですから客ではないですシ、魔王さんからも不敬罪で国外追放処分だそうですカラ、うちには全く禍根も遺恨も残らないんでどうでもいいんですけド」
……オイ。
「特に問題なかったなら今までの話はなんだったんすか？」
「ジム君の深刻な顔が可愛くてついやってしまっタ。今は反省していル」
オーケイ、償う心はあるらしい。
「じゃあ死ね」
即座に放つ鉤突き――ボディブロウ――、しかし店長はふわりと一撃を避ける。
何をやっているかわからないが、武術らしき心得はあるんだよな

あ、コイツ。

「相変わらず速い拳速ですネェ。ジム君、戦場にいた頃よりいい生きた目をしていますヨ」

飄々と、掴みどころなく店長が再び話しだす。

「やはりここのほうが君にいい影響があるようでス」

「俺としちゃ退屈で死にそうですけどね」

生きるか死ぬか、二択しかない戦場の日々は今とは各段に違う緊張感があった。

「我がデッドライン社がこの魔王国に出店出来たのは、魔王さんの被差別種族などの貧困層の労働の場を増やしたいという意向とマッチできたからでス。わずかなところで現れる被差別種族への軽視、過去にある種族同士のしがらみや軋轢が貧困層の労働の場を奪ってしまウ、しかし外国人たるデッドライン社ならそれらにとらわれず、雇用を提供できるからでス」

実際、今の魔王さんの決断と政策がなければリドがまともに生活や就職、進学をできたかは怪しいだろう。あの酔っ払いのオッサンが言っていた「客を取る」それが事実になる可能性は十分にあった。だからこそあの使い古された下衆のセリフに、柄にも無く俺がキレた理由だった。

「ジム君、物を売るということは幸せを与えるということです。物

を得ることは一番手っ取り早い幸福なんですヨ。
幸福とは本来は己の内に問う物ですが、この世のほとんどの人間は物質的な豊さが幸福へ繋がりまス。
私は高潔な人間ではありませン、だがそれでいいと私は考えまス。俗物であるがゆえ、この世に一番多い俗人の幸福がわかるのでス。だから私は君にも知ってもらいたいのでス。どれほどに俗で、せせこましくても、多くの人に幸福を与えられるこの『コンビニ』の仕事の良さヲ」

汚れない者がどれほどに気高く高潔な理想を説こうと、泥だらけで今日を生きるものには届かない。同じ泥にまみれた人間の言葉だけが、汚泥の底で必死にもがく人間を突き動かす。
この世の多くの人は論理的な正しさだけでは動かない。感情と好き嫌い、発言者の人間性が判断に大きな影響を与えている。そういう意味では店長の在り方は正しいのだろう。でもな、俺はあんたみたいに俗を俗として悟れねぇんだ。

「……店長の言いたいことはわかります。だが俺は仕事は仕事と割り切りたいタイプでね。仕事が好きか嫌いかまで指図されたくはないんすよ」

「んー手ごわいですネェ。でもそういうほうが私落とすのに燃えるタチですヨ！　それにほら、好きなほうがやる気が向上して見られますから、その時はボーナスとかあげちゃうかもヨ」

ボーナス？　そんなもん配る気ほんとにあんのか？

「……店長、そういう場合は時給上げるっていうもんじゃないんですか？」

「人件費を容易に上げるのは経営上あまり良くないですカラ、そうですネェ」

ふわりと片腕を俺の首の巻きつけ、ピタリと腰を密着させた。気温が高かったからか、ポールダンスのせいか、店長の体は少し汗ばんでいた。甘ったるい、女独特の体臭が鼻孔を占領する。

「現物給与なんてどうでしょウ、例えば……」

俺の耳元で店長の唇が艶めかしく蠢く。吐息混じりに囁き始めた。

――ていうか近い、顔が近い！

「――私の体を一晩自由に出来るとか、いかがでス？」

「断る」

誰がのるかボケ。

「早ッ！　決断早ッ！　ひどいよジム君、ちょっとは迷ってヨ！」

店長を引き剥がし、距離を取る。ちょっとマトモな話をしているとこれだ、全く油断ならねぇ。

「どさくさに紛れて己の欲望満たそうとしてるだけだろお前は」

「美人コンビニ店長が熟れた肉体を持て余して、店員のやる気上げるなんてよくある話じゃないですカ！　エロマンガとかの世界だト」

「現実を見ろアホッ！」

ああ、頭痛がしてきた。

「店先でなにやっとるかお前らはッ！」

突如響く一括、振り向けば、美貌の魔人、魔王さんが立っていた。

……くそ、入店アラームに気づかなかったぞ。

「店先でナニをしているんだお前ら！　この破廉恥め！」

魔王さん、また顔真っ赤になってるよ。

「……店長に口説かれたので全力でふりました」

「部下を全力で口説いたのですが、全力でふられましタ。とても悲しイ」

「具体的に何をやってたかじゃなくて、店先でやるなと言ってるんだ！」

どうも魔王さん、こういうことには免疫がないらしい。

「あー、はい見苦しくてすいませんでした。ところで魔王さん、今日は一体なんの用事で……」

「うむ、実は……」

「ジム君、それはいけません」

急に口を挟む店長、なんだよ邪魔すんなよ。

「魔王さんは大事なお得意様でス。サービスマンとしてはお得意様のことを覚えて、察し良く動くのは当然ですヨ。魔王さんがみなまでいう前にそれをするのでス」

「……じゃあ、魔王さんがなんのためにきたか言わなくても店長わかるんですか？」

「モチロンですヨ！」

一歩、自信満々の足取りで魔王さんの前へ出る店長。

「いらっしゃいませ魔王さン！　魔王さんが毎月お求めになられるハード路線系ＢＬ誌『薔薇貴族ワイルド』へタレ盗賊受け特集号は今月ももちろん入荷しておりまス。雑誌コーナーに置いてありますからどうぞお求めくだ……」

「全ッ然ッ、違うわバカたれッ！」

やっぱだめじゃねぇか。

午後七時の日常（後書き）

感想、指摘、質問、苦情、泣き言などありましたら感想欄でお受けしますので、遠慮なくどうぞ。

魔王さんの日常

私……じゃなくて我が輩は、ああ、めんどくさい！
なんで魔王に即位したら喋り方までかえなくちゃいけないんだろ？　でもそうしないと秘書官のアリスがうるさいんだよなぁ。
つくづく私には魔王は向いてはいなかったと今更ながら思う。

三年前、私は父上から王位を奪った。魔王国での正当王位継承方二種のうちの一つ、「力による簒奪」すなわち自らのみの力で前王を殺した。……正確にいえば、あれは闘いですらなかった。何も知らなかったバカな小娘が、バカな暴走をして、周りにその尻拭いを押し付けた、ただそれだけの情けない話なんだ。

それでも私には成し遂げねばならないことがあるし、魔王としての責務を果たさねばならない義務がある。あきらめも泣き言も言う資格はどこにも無い。

魔王国に置いて、魔王の責務は二つ、一つは政（まつりごと）、政治に責任を負うこと。
そして魔王国国王独自の責務、「ダンジョンにおいて先頭指揮を取る事」

魔王国では、個人の力が持つ意味は大きい。それは魔王城地下のダンジョンを鍛錬の場とする歴史へとつながる。
その方針は昨今の世界中のダンジョンの衰退にも変わることは無い。
だが、うちの国はうちの国なりに強かだった。
「ダンジョンでは力のみが法である」とし、極最低限が整ったダン

ジョン内限定法を成立。早い話がダンジョン内では冒険者達は探索の成果であるレアメタルや貴金属類等を略奪されても、己の力で取り戻せ！　イヤならダンジョンに入るな！　という実にアグレッシブな法律だ。

こうしてラストダンジョンでは冒険者や魔族が入り乱れ、奪ったり奪われたりを繰り返す疑似的な戦場となった。

そして魔王は魔族達の先頭にたち、冒険者達を蹴散らして成果物を全取りするいわゆる「ボス」としての役目を負うことになる。

……まあ、早い話が冒険者の上前をハネる仕事なわけだ。

元々、強大な魔力を持つのが魔王族の特徴。それを頼られるのは当たり前の結果だろう。

正直私は戦いはあまり好きでも得意でも無いが、先頭を張って目立てばそれだけ国民からの人気も上がる。

そんな私が必死にやる気出してるのに中にはアホな冒険者もって、あぁ思い出したらまた腹立ってきたあのバカ勇者ぁぁぁあっ！

それはそれとして、今はデッドラインの店長と一つ話さねばならないことがある。ついでにリドの顔でも見に行こうと寄ってみたわけだが……なんで店先でイチャついてるんだこの店長と店員は！？

「あ、失礼しました魔王さン。『薔薇貴族ワイルド』ではなく、耽美系路線の『ＢＬ乙女Ａチーム』のほうでしたカ？」

「そうじゃない！　あぁ後でどっちも買うけど。私、じゃなくて我が輩が話したいのはこの間の……」

「……申し訳ありませんでしタ魔王さン」

「……へっ？」

深々と頭を垂れる店長。完璧な謝罪の姿勢。

「先日のジム君の暴力事件はひとえに私の指導不足によるものであり私に責任がありまス。本来店員がお客様に暴力を振るうことは許されませン。しかし彼にも彼なりに許せないことがありやってしまったことなのでス。どうか魔王さん、私たちを許してくださイ」

「……店長」

店長の後ろでは店員――たしかジム・スミス――が普段冷静な彼らしくない、オロオロとした様子で店長の背中を見つめていた。

「い、いや店長、別にその件は追求するつもりはないぞ！？　大体あのバカは国外退去だし、リドの事をあんなふうにいってたら私だって怒る。もうあの件は終わりでいいんだ！」

「……ではこの件は終わりということデ？」

「ああ、終わりだ！　無しでいい」

店長が急激に姿勢を伸ばす。そのまま勢いよくターン、ブロンドの長髪をなびかせ、ジムの方へ振り向いた。

「ほらネジム君！　やっぱり大丈夫だったでショ！」

……しまった。つい勢いで許してしまったけど、この件盾にして色々要求通したりとか出来たじゃないか！

「ところで魔王さン、一つ聞きたいのですがジム君がオッサンを挑発した時にかなり口汚いことといったそうデ。一応本社に詳しい報告書を書かなきゃいけないので証言として具体的に何を言ったか教えてもらってもいいですか？」

「え、言わなきゃだめなの？」

かなり口に出すのもはばかられるくらいアレな言葉だったなぁ。

「そこの本人に直接聞いてくれ。わた、我が輩は言いたくない」

「じゃ仕方無いですネ、ジム君もう一回言ってみテ」

店長と私の視線がジムに向く。気まずそうな顔をしながらジムが小さな声で呟いた。

「……この××××野郎、です」

やはり何度も言いたくなかったのか、今にも消え入りそうな声だ。

「ちょっと聞こえませんヨ。ほらジム君男の子なんだからもっと大きな声デ」

「この××××野郎」

先ほどよりはっきり聞き取れる声。店長もピクリと反応を示した。

「そ、そんなことヲ……　ちょ、ちょっと聞き取れなかったのでも

う一度お願いしまスジム君」

……あれ？

「この××××野郎」

「っんぅ！　……も、もう一度お願いしまスジム君」

店長がビクリと背を震わせた。両手で自分の体を抱きしめながらなにやらもじもじと身をよじらせる。

「この××××野郎」

「あン……もっと、もっと強く！」

――ええと、これは……

「……この××××野郎っ！」

強まるジムの語気に連動するように、店長の身のよじりが大きくなる。いつしか店長の呼吸には熱を孕んだ吐息が漏れていた。

「はぁ、はぁ、……ジム君、もっともっと強く言っテ！」

「……こっのっ、××××野郎！」

「んぅんんっ！　……良いですよジム君、もっと、キツく罵って！」

「お前は俺に何をやらせてんだよ！」

「だからお前ら何をやってるんだ！」

ジムと私が同時に突っ込む。店長の仮面に隠されていない顔の下半分と首もとがうっすらと赤がさしている。

「……いや別に上司の言うことに従っただけなんですが」

「思いがけずなかなかツボにハマる言葉だったのでつい堪能してしまいましタ。口汚いジム君もなかなか新鮮ですネ」

「だ、か、ら、っ！　何をしてたかじゃなくて店先でやるなと言ってるだろうがッ！！」

思わずレジの机を叩き叫ぶ。ああもうだめだ、こいつら、というかこの店長と話すといつも変な方向に話が進む。とっとと話を終わらせないと。

「わた……ああもう私でいい！　私が今日来たのはヒールスポットの撤去を命じるためだ！　魔力を回復するヒールスポットは冒険者の過剰な支援につながるから使用禁止にする」

首をかしげ、少し困った仕草をする店長。言ってやった、散々話そらされたがとうとう言ってやったぞ！

「んー、正直うちとしてはヒールスポットは大人気なので使用中止はキツいですネ。それにほら、魔族の方も使用しているんですヨ？」

「それは別に私のほうから言い渡す。とにかくヒールスポットは撤去。これは確定だ。いやならダンジョンから出て行ってもらおうか？」

「仕方ありませんネェ、……ジム君ちょっとホットスナックの『からあげ氏』揚げてくれませんカ？　十個ぐらイ」

ジムが不思議そうに眉をよせる。

「……？　店長、からあげ氏は五個ぐらい揚げてあるのがありますよ」

「わかってますヨ。それでいいんでス。ほら早く向こうのフライヤーで揚げてきて下さイ」

店長に促され、いまいち納得いかない表情のままトボトボとフライヤーに向かうジム。

「さて、魔王さン。これをお読みくださイ」

レジの足下の棚から取りだしたビニール袋。その中から取り出されたのは一冊の本。やたら薄く、表紙にはカラフルな漫画の絵が……ってこのキャラクターは？

「これ、ジャンプの漫画のキャラじゃないの？」

書いた人間は違うようだが、デザインには見覚えがある。

「おやそのキャラをご存知ですカ、さすがですね魔王さン。まあまずはお読み下さイ」

言われるままにページをめくる。ていうかこの内容は……

「ＢＬじゃないかコレ！？」

「そう、これは私の国の伝統工芸作本技術『ドウジンシ』で作られたＢＬ本です」

うおっ、しかもなかなかハード！

「魔王さん、もしヒールスポットをこのままにしてくれるのでしたラ、ドウジンシを注文できるカタログを毎年夏と冬にそちらにお送りいたしますガ？」

店長の眼が怪しく光る。コイツはいつでもそうだ、相手の趣味や傾向を細かく調べ、ワケのわからんツテやコネ、手練手管で籠絡にかかってくる。また絶妙に私の趣味にジャストミートな物を！

「私を買収する気か！？」

「いえいエ、これは正当なる取引ですヨ。なにせ魔王さんに指図できる者などいないんですかラ」

だめだ、ここでのんでは店長の思うツボ。断固はねつけねば！

「まだ迷っているようですネ。じゃあ最後の切り札でス。実はうちの店には月毎に新商品のサンプルが届くのですガ」

「……それがどうした？」

「私のツテで魔王さんの所にスイーツの新商品のサンプルを回せるよう手配できまス。ちなみに来月の新商品は『フルーツトマトの涼夏ゼリー』でス」

なにそれ食べたい。ていうかトマトがデザートになるの？

「……毎月届くのか？」

「ええ、二種から三種類ほどですネ」

「……カタログのドウジンシっていうのは……その、受け取り場所の指定を魔王城じゃなくてこの店にも出来るか？　見つかると秘書官のやつがうるさいんだ」

アリスに見つかるとほんとに捨てられそうになるからな。

「お荷物のお預かりなら承ってますヨ」

……やはりこの店はサービスがいい、良すぎる。

「――仕方無い、そこまでいうなら次の条件改正まで一年、待ってやろうじゃないか」

これはアレだ、欲望に負けたんじゃない、あえて相手の手のひらに乗ると見せかけて、ヒールスポット撤去より大きいメリットを得るためのアレだ、交渉術とかそういうやつだ。そういうことにしておこう！

「ありがとうございまス魔王さん！　あ、もちろん届いた荷物には間違えないよう『魔王様用ＢＬ』と書いた紙を貼っておきますから心配しないで下さイ！」

「――それは止めてくれ」

魔王さんの日常（後書き）

試験的次回予告

「ハァーイ、皆さんこんにちワ。『店員&店長』の『誰にでもマヨネーズかけるほう』店長でス！」

「……お前言葉の意味をキチンと理解して言ってるよな？」

「突っ込みがローテンションなジム君にランボー怒りのマヨビームッ！」

「ああ、止めろ、コラ！　うわっヌルヌルする！　目に入った！」

「次回のダンジョンコンビニ　デッドラインは『Ｉ　ｔｈｉｎｋ　Ｉ，ｌｌ　ｐａｒｔｉｃｉｐａｔｅ　ｉｎ　ｔｈｅ　ｔｒｉａｔｈｌｏｎ　ｗｉｔｈ　ｍｙ　ｏｌｄ，　ｏｎｅ－ｓｐｅｅｄ　ｂｉｃｙｃｌｅ．（トライアスロンに、買い物用の自転車で出ようと思うんだ）』でス。それではシーユーネクストタイム！」

「トライアスロン舐めすぎだろッ！」

※店長の言動と次回の内容は全く関係ありません。

オーガと潜ろう1

――結構冷えるな。

幅三メートル、高さ四メートル程、左右と天井を覆う黒き壁は有機的なラインを描き、うねっている。壁に斑状に取り込まれている発光機関は思いの他強く、視覚には問題は無い。おかげで念のために持ってきた照明道具は無駄になりそうだ。

このような通路のサイズや、壁についている発光機関の存在は、作成者である謎だらけの消えた超技術保持種族、前方を外れた物(アウトフロント)が少なくともサイズは人類とそれほど変わらず、俺たちと同じ光を使った視覚を持っていたと推測出来る。

――まあ、それでも謎だらけなんだが。

遥か古より世界中にあるダンジョンは、一体いつ頃からあったのか全くの不明だ。中心にあるとされる、魔力を生み出す重魔力炉芯の構造原理も不明、なぜ今になって魔王城以外のダンジョンが枯渇しているのかも不明、その他まとめだしたら切りが無いほどの不明点だらけだ。

ダンジョン――に成る前のアウトフロントの造った何か――の開発目的は重魔力炉芯による魔術エネルギー発生、もしくは希少物質作成施設ではないか？　というのが大方の意見だが、魔力を吸収することにより再生、増殖する構造体が暴走――超長期経年劣化によるもの、というかそれ以外原因が思いつかない――することにより施設は「迷宮」へと変質してしまった、というのが現在の主流の説となっている。

――今この状況じゃんなこたぁどうでもいいんだが……

視覚に問題は無い、といっても流石に遠くは薄暗い。通路の向こう側は闇が横たわっている。そもそも構造体の増殖具合によっては照明が十分ではなかったり、危険な構造になっていたりする事も多々ありのんびりと気を抜くことは出来ない。

最初の作成理由はどうあれ、最早ダンジョン（ここ）は血と闘争、欲望と栄光を得るための戦いの場。油断すれば即、死が待ち受けている。

「先輩、ちょっとは荷物持ってもらえませんか？」

歩を進める俺の背中へ、投げかけられる落ちついた男の声。

「お前は運搬、俺は安全確保。そういう役割分担だろ？　文句言わずキリキリ歩けよダイム」

振り向いた先には巨大な人影。

二メートル三十センチの背丈、分厚く密集した筋肉、浅黒い肌、針金のように生い茂る髪とそこから覗く二本の角。顔付きは骨張り、掘りの深い、奥に潜む目は爛々と輝く。口元には下の犬歯が二本頭を出していた。

そして、その戦闘力溢れる雰囲気をぶち壊す、オレンジと白の暖色ストライプの「デッドライン」の制服の上着。

「そうは言っても僕もう結構持ってるんですよ？　そろそろ変わって下さいよ」

「お前戦闘はキライだし下手だって言ってたじゃねぇか。適材適所だ、大人しく運べ」

この鬼人族（オーガ）は十八才の青年ダイム。オーガでも恵まれた体格の持ち主ながら、普通は荒くれ者や闘争中毒の多いオーガの中でも珍しい大人しい性格のヤツだ。

実家は代々虐殺戦鬼（スローター）の称号を持つ戦闘職だそうだが、本人は進路に大学を希望、親と喧嘩してバイト浪人をしながら一人暮らしをしている

希望学科は「迷宮生物学」　デッドラインのバイトに希望したのもダンジョン研究観察も兼ねてだそうだ。

ダイムの肩から下げられたそこそこの大きさの銀色の箱――保温機能付きのキャリアー――が揺れる。

歩きながら手書きの地図を確認、現在の階層は地下十五階だ。

「そろそろ次の階層の階段が見えるはずなんだが……」

「先輩、その地図手書きなんですか？　ダンジョン事務所で売ってるやつじゃなくて？」

ダンジョン内のマッピングした地図はある程度までならダンジョン入場受付の事務所で手に入る。

いわゆる魔王城の外貨会得、小遣い稼ぎなんだがこれがそこそこボる上に、トラップが表記されないのだ。

「大丈夫だって、夕方タバコと新聞買いにくるコボルトのおっちゃんたちいたろ？　あのオッサン、ダンジョンのトラップ設置と怪我人回収係の人たちだから。あのおっちゃんたちから聞いたやつだか

ら心配無いよ」

コボルト族独特の、キツネのぬいぐるみのような横顔と、その見た目に全くマッチしない年齢と性別にそったやたらダンディな声のオッサンコボルトのシゲさんを思い出す。

「やっぱり戻って店長から地図借りた方が……」

「もうじきなんだ、すぐにつくよ。ったく、あのボケ店長また面倒なサービスはじめやがって……」

こうしてダンジョンに潜る事態になったことのはじまりを思い出す。

そう、あれは一時間前、出勤した俺に店長がやたら高いテンションで声をかけてきたあの時からだ。

「ジィームッくーんッ！」

出勤一番、俺の顔を見た途端に飛びかかる店長の顔を間一髪、掴む。力を込めながら抑えた。

「オウ、遠イ！？　ジム君との距離がとても近くて遠イ！　これが心の距離！？　でも肉体の距離さえ近ければ私はいっさい構いませんン！　カモン、零距離射撃！」

「だ、か、ら、抱きつくのは止めてもらえませんかねって、暑苦しいんだよぉぉぉッ！」

狭いスタッフ室で無理やり店長を引き剥がす。店長が口元で指を

くわえながら残念そうな仕草を見せる。

「むー、ジム君にはちょっとお出かけしてもらうので、今のうちにジムニウムを吸収しようと思ったの二……」

店長の服装は先日のスーツではなく、店の制服であるシャツとスカート、エプロンだ。それでもやたら胸元を強調するのは忘れない。

「ジムニウムは存在しねえと……お出かけ？」

「ええ、ジム君、お出かけですヨ。ちょっと地下二十階まデ、商品の配達にネ」

店長の足元には銀色のキャリアーが二つ置かれていた。

「……配達？」

「……つまり、ダンジョン内配達サービスを始めたから届けてこいと？」

「ええ、そういうことでス。ジム君頑張って！」

十五分後、店長の説明を聞く所によると客の要望を受け、ダンジョン内へ商品を配達するサービスを試験的に開始するという。

「でもね、店長。ダンジョン内だと下手すりゃ商品を盗られても文句は言えないんすよ」

デッドライン内なら通常の魔王国の法律が適用されるが、一歩外に出たダンジョン内ではダンジョン法が適用される。これはデッドラインの店員も例外ではない。
つまり商品が取られたり襲われる可能性は十分にある。

「だからこそ『デッドラインの暴力装置』と影口叩かれてるジム君の出番なんですヨ！」

「……誰だ『デッドラインの暴力装置』って言ったヤツ？」

どうやらそいつとよく話あって平和的解決を目指す必要がありそうだ。主に肉体言語を使って。

「まあ、二十階までなら大して強い魔獣もいないでしょうし、行けると思いますけど」

ダンジョン内は充満する魔力により、独自の発達を遂げた生態系が構築されている。最も強く魔力が充満する最高階層を頂点として、外の野生動物を数段凌ぐダンジョン内生物、通称『魔獣』がダンジョン攻略の難易度上昇に一役買っているわけだ。
ちなみにデッドラインのある場所は地下十階、地下二十階なら中堅冒険者がうろついて階層だ。俺なら問題なくいける。

「そう来なくっチャ！　念のためダイム君をつけますから頑張って下さいネ」

「所で届ける商品ってなんですか？　あんまり重いのは勘弁なんですけどね」

「ふっふっふ、実は我がデッドラインの目玉商品なんですヨ」

屈むながらふたを開ける店長。谷間が見えそうになるが辛うじて目をそらす。コイツわかっててやってんな。

「あら、ジム君別にもっと見ててもいいんですけド……　さア、これがうちの目玉商品ですヨ！」

店長の掲げた四角形の物体。というかコンビニ弁当。

「『辛そうで辛くない少し辛いあっやっぱすげー辛いだめ！　後からきた！　これだめ！　死ぬ！　な食べられるラー油を使った特選牛カルビ重弁当』でス！」

「ただの激辛じゃねぇか！」

「牛肉は高級な物を使用した前日予約のみ販売、一個三千ギル、限定二十食を全部注文してくれたありがたい大口のお客様がいるんですヨ。　あ、あとついでにこれも注文してましタ」

魔王国で肉体労働者の平均日給は八千ギル前後、確かに高級だ。更に店長のだしたもう一つの箱。書かれた文字は「デラックス世界のウサギコレクション」

「……食玩ですか？」

「ええ、世界中のウサギのミニフィギュアでス。ワンカートン大人買い、シークレット狙いですかネ」

「ここダンジョンですよ？」

弁当ならわかる。探索中の食事目的だろう。たが食玩は何に使うんだ？

「ま、私たちはお客様の要望に応えるだけですから、細かいことは気にしなイ！　それじゃいってらっしゃイ」

――なんかわからんつーか、誰なんだこの注文した「サイトー」って？

うっかり種族名を聞き忘れたが、ダンジョン内にいるなら魔王軍か冒険者のどちらかだろう。とりあえず、今することは。

「先輩、アレ……」

ダイムが前方の薄闇を指さす。通路の先、階段前に広がる大広間のような空間。

「ああ、知ってるよ」

とっくに察しはついている。なんせ剣を打ち合う金属音が狭い廊下に響いているんだから。

剣士の打ち下ろしを、掲げた斧でオークの魔族が防ぐ。

バックステップで下がる剣士、オークの反撃の斬撃が宙をなぐ。

もう一人の戦士の槍が、別のオークに突き出される。とっさに身

をひねったオークは槍を掴み戦士の動きを封じようと力を込めた。

「……戦闘、ですよね、これ？」

困った表情でダイムが尋ねる。

「ああ、戦闘だな、ダイム」

魔王軍の魔族対冒険者、ダンジョンなら日常茶飯事だ。

「どうしますか？　階段は向こう側ですよ」

「そりゃお前、やることは決まってんだろ」

にこやかに、できるだけ愛想を振りまきながら四人の死闘へ近づく。

「ちわぁーす、毎度ありがとうございます、コンビニデッドラインです。配達の邪魔なんで早く済ませるかどいてもらえません？　ダメなら実力で排除しますけど」

「――先輩ィィィッ！？」

オーガと潜ろう1（後書き）

試験的次回予告2

「店長の魔の手を逃げ出したジムを待っていたのは、またしても地獄だった。
明日をも知れぬ暗闇でもがく、それだけが冒険者（ボトムズ）生き様。
血と闘争、修羅のダンジョンでジムはこの世の乾いた真実と出会う。
配達の先に幸福などない。
次回、ダンジョンコンビニデッドライン『誤配』
コンビニ店員はみな愛を見ない」

「……シゲさん何やってんすか！？」

「おう、ジム。ちょっと店長に次回予告頼まれてな」

※シゲさんの発言と次回内容に一切関係はありません。絶対にありません。

オーガと潜ろう2

「ちょ、ちょっと先輩！」

慌て駆け寄ってくるダイム。急に現れた大柄なコンビニの制服のオーガに、冒険者二名がギョッとした顔をする。

「なにやってるんですか、刺激しちゃダメですよ！　お客さんなんだし……」

いやいや、こういう時はナメられちゃいかんのよダイム君。

「まあ待てって、ここはダンジョンだぞ？　うかつに愛想よくしても……」

「なんでデッドラインの店員がこんな所（ダンジョン）にいるんだ？　たしか店外の販売は禁止されてたよな」

「そうだよなぁ、店長に聞いたら『うちは店外販売はしませン』っていってたぞ？」

動きを止めた冒険者二人、細身の剣士と太めの戦士がしゃべりだす。

「あれか、とうとう要望に応えて店外販売やりだしたとかか」

「え、店外販売始めたの？　今日弁当忘れちゃってさ、五百ギルく

らいの弁当売ってない？」

魔族の二人、いまいち顔の判別の付きにくいオーク二名も話しだした。

「お前まだ一日昼飯代五百ギルかよ、カミサンにちょっとは交渉しろよ」

「うるせえな、うちのカミサンは魔王様より怖ぇんだぞ。そんな真似できるか」

オークも妻帯者は色々大変らしい。

「いや、うちが始めたのは配達サービスで店外販売じゃないんですよ。弁当も配達分以外は無いんです」

思わず顔をしかめるオークのおっさん。剣士や戦士も期待外れだと表情で語っている。

「だめなのか……昼メシどうしよう」

「大人しく上まで戻るか」

うんざりとした様子のおっさんオーク二人。剣士がしげしげと俺を覗きこみ、はっと気づく。

「あ、お前ジム・スミスだろ！」

「え？……あ、ほんとだ、『デッドラインの暴力装置』とか『鬼軍曹の軍曹抜き』とか言われてるジム・スミスじゃねーか」

おい、あだ名増えてんぞ。

「先輩、『鬼軍曹の軍曹抜き』ってそれもうただの鬼ですよね」

ダイム、鬼人（オーガ）のお前に言われたかないわ。

店には色々な客が来る。大体は魔族か冒険者、いたって普通に物を買っていく。だが中には困った客もいるもので、そういった客は店長が冒険者（ギルド）協会に連絡するなどの注意をするのだが、それでもダメなヤツはいる。そういったのを店から追い出したりはしていた。主に殴り飛ばしたりして。

「ダンジョンに潜らせるならやっぱあんたみたいなヤツが必要なんだな。無駄に腕っ節のあるの雇ってんなとは思ったけど」

「まー、まさかリドちゃんみたいな子を潜らせるわけには行かないよなぁ」

「さすがにリドみたいな子供をこんな所に歩かせませんよ」

戦闘能力が無い者がダンジョンを歩くのは間違いなく自殺行為、ちなみに店への出勤は魔王城へ繋がる非常口が店内にあるので、その辺は安全だ。

「そうだなぁ、もしリドちゃんみたいな娘がダンジョン歩いてたら、俺は目的地まで送っていくよ」

「俺は帰りのコンビニまで送っていくね」

「あの娘、家貧しいけど頑張ってるって評判なんだよなぁ」

「リドちゃん見てるとなんか親戚の姪っ子を思い出すよ」

いつの間にか会話に入っているオークのおっさんズ。それにしてもリド大人気だな。

「というわけで通らしてもらいますよ。早くしないと弁当冷めますしね」

ピクリ、と髭の戦士が反応を示す。なんだまだ用があんのか？

「なあ、その弁当ってひょっして、『辛そうで辛くない少し辛いあっやっぱすげー辛いだめ！　後からきた！　これだめ！　死ぬ！　喉が焼ける！　あぁ、食べるんじゃなかった、俺のバカ！　な食べられるラー油を使った特選牛カルビ重弁当』じゃないか？」

「……ええ、なんか名前長くなってる気がしますけど、多分それですよ」

なんだ、何が言いたいんだコイツ。戦士がジリリとにじりよる。

「俺、それ予約しようとしたら店長に『本日は予約終了でス』って断られたんだよなぁ……」

「そうだな。それがちょうど腹が減ってる時に目の前にあるとは……」

「一個三千ギルの高級弁当だっけ、俺も食ってみてぇなぁ」

「俺も俺も」

気がつけばオーク共も距離を詰めてきていた。……クソ、こいつら組みやがったよ。

「先輩、なんか雲行きが怪しいんですが……」

俺の背後でダイムが心配そうに呟く。もうちょっと図体に似合った度胸つけてくれ。

「ダイム、ちょっと下がってろ。――すぐ終わる」

剣士が得物を片手にだらりとさげ、俺に再びしゃべりかける。その表情には、人数的優位による余裕が見える。

「悪いがここはダンジョンだしな、大人しく荷物を貰おうか。恨むなら武器無しでダンジョンをうろついた己の不注意を……」

「悪いが」

不意に言葉を遮られ、剣士の顔が一瞬当惑する。ゆっくりと息を吐き、腰を落とす。

「俺は既に武装してるんですが」

踏み込みと共に腰だめの右拳を突き出す。緩やかな捻りと共に直進。

「っ！」

反射的に剣を横に降る剣士、激突する剣と拳。

響くのは甲高い金属音。確実な、打ち砕く感覚。真上へ高速で飛ぶ小さな影と火花。

「――なッ」

剣士がほおけた視線で俺の頭上を見る。

俺からは見えないが、大体想像はつく。折れて飛んだ剣先が、ダンジョンの天井に突き刺さったのだろう。

「ひッ」

剣士が息を漏らすより早く、練り上げた気を乗せた左拳を鳩尾へぶち込む。

割れた鎧の破片をこぼしながら、声も無く剣士が崩れ落ちた。

これが俺の学んだ拳法流派、南州の八卦掌が一派、『双極拳』の基本防御の型。

練り上げた気による外功で、一瞬の間腕の皮膚を強化、さらに通常は捻る回転により掴みや拳打を無効化するための防御技術『転肢剄』を用いることにより、剣をはじく。

いかなる剣も刃筋が立たねば物は切れない。さらに横流しに力を流し弾き飛ばす。慣れてくれば安物の剣程度、へし折ることも出来る。

うめき声一つ上げず倒れる剣士に戦士やオーク共が一歩、足を引いた。

「す、素手で剣へし折りやがった……ッ！？」

倒れる剣士を足下に置き、残心を崩さず、一歩、詰める。

「今更謝罪とかは入りませんよ、――――もう遅いですからね、お客さん」

精一杯の営業スマイルを浮かべ、俺は告げた。さてもう一仕事。

オーガと潜ろう3

「そんじゃ、覚悟はいースかね」

ゆっくりとした歩調で前へ出る。意を決したように急激に踏み込むオークのオッサンその一、手に持つ厚みのあるバトルアックスを垂直に振りかぶり、必死の形相。斧の峰に左の腕をピタリと重ねている。一撃に全筋力と体重をかけて叩き割る必殺の構え。

「フンッ！」

上下へ天地を裂くが如く一閃する刃、しかし軌道はとうに読めている。

上体をわずかに捻り、アックスが傍らを空ぶるのを確認。タイミングを合わせ、横薙ぎの裏拳をアックスの峰めがけて解き放つ。

ッ　ゴ　ォ　ン　！

巨人の骨をへし折るような激突音と共に、火花が刹那の内に咲いて散った。アックスが半ばからへし折れ、破片は向こう側の壁にしっかと食い込む。ここぞという時に安物は使うもんじゃないぞ。

「お、斧まで……ッ！？」

折れた斧を手に呻くオークへ、右の掌底を顎先へ掠めるように撫で振るう。

「――っ」

狙いはドンピシャ、いい感触。顎先へ伝わる衝撃がテコの原理で脳をシェイク。力無く、膝からオッサンが崩れ落ちた。

「二人め、と」

さぁー乗ってきたぞ、サクサクいこうか。

「う、うおおおッ！」

叫びながら槍を突き出す髭の戦士。俺は打突に合わせ拳を振り下ろす。

拳に当たった槍の穂先が下方へ曲がり、生えるように床へ突き立つ。

「――セイッ！」

脚を上げ、気合いと共に震脚を槍先と柄の接合部へ振り下ろす。ドンッという衝撃が走り、呆気なく刃が外れて床を跳ね、壁へ突き刺さった。

震脚の一歩を起点に前へ踏み込み、戦士との距離を詰める。

「バケモ……ッ！

二歩めの踏み込みで更に加速、戦士がなにやらド失礼な事を言い終わるより早く、腰の回転動作からの肘鉄をこめかみへ叩き当てる。

ぐらりと体が揺れた。無言のまま倒れる人間がもう一人追加。

「ほい三人目」

最後に残ったオークのオッサン――たしか昼飯代五百ギルの方―

―がアックスを握りしめながら唖然とした表情で俺を見ている。そんなに見つめんなよ、穴があいたらどうする？。

「ちょ、ちょっと待ってくれ！　俺は別に奪うつもりは……謝る、謝るから！」

わたわたとした動作で武器を捨てる、こちらをなだめようと必死だ。これは一つ声をかけた方がいいだろうか。

「あのー、お客さん。大人しくしてもらえれば、こっちもありがたいんですけど、いいスか？」

「あ、ああ！　大人しくする！　だから……」

ああ、こりゃ良かった。

「ありがとうございます、お客さん。こっちも出来る限り」

ゆっくりと間を詰める。

「――――手早く一瞬で終わらせますから」

「……ヒッ、ヒイィィィィイッ！！！　ぐっ」

ほい四人めっと。謝っても遅いって言ったじゃねーか。

「先輩、今の人たち、大丈夫なんですか……？」

後ろで俺を見下ろす巨漢、ダイムが呟く。お前その質問何度目だ。大体オッサンどもを置いてきた十五階は既に通り過ぎた後だ、忘れろ。

「べーつに死にゃしねえよ。死んだほうがましだと思うぐらいぶん殴っただけだ」

黙々と歩を進める。現在十八階、目的地まであと少しだ。

「……顔から倒れてましたけど、あれ明らかにヤバい倒れ方ですよね」

「あそこに適当に転がしときゃ見回りのコボルトのオッチャンたちが回収すんだろ。余計な心配すんな」

一見無法地帯なダンジョンにも法はある。最低限の安全保障（セーフティー）というやつだ。　ダンジョン内での殺人や障害は戦闘や事故ならば基本罪には問われない。ただし明らかな戦闘不能者を攻撃、死に至らしめることは違法だ。「誇り高き戦士の行いではないから」「ダンジョンは試練の場であり無益な殺戮の場ではないから」というのが理由とされている。

そしてその安全保障の実質管理として整備員であるコボルトのオッチャンたちがいるわけだ。

基本業務はトラップ設置と戦闘不能者の搬送。完全中立で動くダンジョンの管理人たち、オッチャンたちの働きでダンジョンは最低限の安全を保っている。

最も、魔王軍所属の基本公務員扱いの魔族と違い、冒険者は搬送された病院で目玉が飛び出るほど高額の治療費を請求されるわけだ

が。

「それにしても先輩、ちょっとこれは参りましたね」

立ち止まったダイムがハンドアックス――雑用に使う小型の斧――を一薙ぎ、鋭い悲鳴を上げながら影が後ろへ跳びすさる。

発光機関に照らされる小さな影。子供ほどの背丈に灰色の毛並み、短い足と長い腕。

「ダンジョンに来たらこういうのは恒例だからな。ま、とっとと追い払え」

もう一匹の影へ軽めの拳打を繰り出す。よけながら同じく下がる影。

歯を剥いて威嚇、潰れたカエルのような鳴き声を放つ。

『ゴブ・エイプ』 ダンジョン内に生息する迷宮獣の一種だ。ダンジョン外のサルと似たような外見ながら、それをしのぐ筋力と敏捷性を持つ。ただ基本的には初心者や中級者向けの弱めの迷宮獣だ。

「数は三匹、群れからはぐれたヤツらか？」

ゴブ・エイプは基本的には二十匹前後の群れで生きる。これしかいないならコイツらははぐれの寄せ集まりだ。

「……そうでも無いですね」

斧を構えながらダイムは反論する。大柄なダイムが小型の斧を持つと玩具に見えてくるな。

「ゴブ・エイプの群れからはぐれるのはリーダーに敗れた若いオスだけです。三匹中二匹がメス、しかも毛並みと体長から若い。ならばこれははぐれの寄せ集まりではなく、群れから迷子になった個体だと思います」

普段の気弱な態度とは裏腹に、妙にきっぱりと断言する。つーか詳しいなダイム。

「あれ、お前そんなキャラだっけ？」

「僕の希望専攻学は『迷宮内生物学』ですよ。これぐらいしっててて当然です。それに学問は実践して初めて価値があるんですよ」

ダイムの胸が大きく膨らむ。鋭い吸気音、やがてその牙が覗く口から放たれる巨大な吠え声。

「キ　ィ　オ　オ　オ　オ　ェ　エ　ェ　ッ　ッ　！！」

「うおっ！」

思わず耳をふさぐ。暴力のような空気振動がダンジョンの歪んだ壁を殴打。鼓膜が痛い痛い痛い！

「なんだよ、ダイムッ！　急に野生化しやがって」

吠え声がピタリと止む。落ち着いた様子でこちらに振り向くダイム。

「野生化したんじゃありませんよ、ゴブ・エイプの警戒の吠え声の真似したんです」

周りを見るとゴブ・エイプは一匹も見当たらない。逃げ去ったようだ。

「逃げてくれましたか、我ながら上手く真似出来た様ですね。生き物を傷つけるのは正直イヤですし」

勇猛と怪力が売りの鬼人族とは思えぬ発言をするダイム。

「……なあ、上手く真似出来たとかじゃなくて、単純にお前の大声に驚いただけじゃね？」

「ち、違いますよ！　ちゃんと真似出来たから逃げたんですよ！」

えー、怪しいなぁ。

キャリアーを再び担ぎ直しながら、歩み始める。さすがに十五階以降は迷宮獣が増えてきた。

「しかし妙ですね」

「何がだ？」

強面の顔を傾げ、疑問を口に出すオーガ。

「さっきのゴブ・エイプや、その前の迷宮獣もそうでしたけど、このあたりの階層の迷宮獣は積極的に襲ってくるタイプじゃないんですよ」

人を頻繁の襲う迷宮獣はもっと下の階層に多い。このあたりは所

詮は初心者向けだ。しかし十六階を過ぎた辺りから結構襲われようになった。まあ全部余裕で撃退したけど。

「所詮は動物だしなあ。腹が減りゃ人ぐらい襲うだろ？」

「それでももっと襲いやすい獲物はいるはずです。それにあの攻撃性は飢餓というよりは、何か危機感による不安からのような……全体的に気が立ってるというか」

「あんなサルだかカニだかの機嫌を気にしても仕方ねぇぞダイム」

いまさら迷宮獣の都合など考えても仕方ない。どうだろうがとっとと荷物届けて帰るのがベストだ。

「……ちょっと待って下さい、先輩」

「どうした」

またも足を止めるダイム。じっと耳をすましている。

「なにか……人の、女性の声が聞こえませんか？」

「んん？　ちょっとまてよ」

神経を耳に集中、ダンジョンの静寂に耳を傾ける。

わずかに聞こえる高い、女性の声を連想させる音。しかも泣き声。

「……ダイム、こりゃ人か？」

「迷宮獣の中には人の声を出せる種類も存在します、ただこの階層

にはいないはずです」

人の声で呼び寄せる迷宮獣は攻撃性の高いタイプだ。

「ダンジョンで泣き入れる冒険者なんて聞いたことねぇよな。ということはやはり迷宮獣の類……」

「もし擬声のできる迷宮獣なら……しかも低階層……新種か？……」

顎に手を当てブツブツとつぶやき始めるダイム。おーい聞こえてっか？

「先輩、あの声の方へ行ってみましょう！」

巨漢を声の方へ向け、進み始める。オイコラ待て。

「おい、冒険者を助ける義理は基本的にないんだぞ！」

ダンジョンを歩く以上、自分の身は自分で守るのは最低限の常識だ。

「もし、人ではなく迷宮獣なら、新種の可能性があります！」

振り返らず叫ぶダイムの声には熱気がこもっていた。

「もし新種だったら学名に僕らの名前が載るかもしれません。図鑑に名前が載るんですよ！　これは探すべきですよ！」

「そっちのほうかよ！」

声の主が割と簡単に見つかった。
ひだのように異常形成された壁の隙間で、屈みこんでシクシク泣いていたのだ。
年は二十歳ほど、赤毛の髪に黒ローブ、宝玉のつい杖などちょっと時代遅れ――つまり中古――の装備。少しそばかすのある顔には、泣きはらした赤い眼がある。見ての通り、人間だ。

「新種じゃ無かったんだ……」

たんこぶをつくり、ガックリと肩を落としたダイムが呟く。……こいつもなかなかアレな性格してんなぁ。

「あ、ありがとうございます！　ありがとうございます！　わ、私パーティーからはぐれちゃってどうしていいかわからなくて……もう本当に死ぬかと思った……」

メリルと名乗る女性の新人冒険者、魔術師が泣きながら礼を言う。最初に見つけたのが強面のダイム――しかも新種が発見出来ると浮かれていた――だったため、半狂乱で杖をダイムに振り回していたのを俺が取り押さえ、なんとか落ち着かせたのだ。

「あ、あのお願いですから一緒に地上まで連れて行って下さい！　私一人じゃ無事に帰れません……」

あー、やっぱそうくるわな。

「悪いんだけどさぁ、俺ら二十階まで用事あるから上いかんのよ。

あんたも冒険者ならその辺は自己責任で……」
「だったら二十階までついて行きますから連れて行って下さい！お願いですから！」
拝み倒すメリル。そうは言ってもなぁ。
「先輩、しょうがないですからここは連れていくしかないんじゃないですか？　さすがに見捨てるわけには……」
彼女を見つけたダイムも口添えしてきた。しょうがねぇか。
「じゃあ、あんたも二十階までいくか？　地上に戻るのはその後だぞ」
「ありがとうございます、ジムさん、ダイムさん！　あの、ところで皆さんの職業は一体……？」
メリルが不思議そうに俺とダイムの制服を見つめている。まあ気になるわな。
「ああ、十階にデッドラインってコンビニあるだろ、そこの店員」
「……コンビニ店員がダンジョンに？」
「弁当配達でもぐってんだ」
メリルの目が一瞬点になる。新人冒険者とはいえ、冒険者がコンビニ店員に助けられる現実は少々キツかったか。

「そ、そうですか……」

細い体をふらつかせるメリル。結構自信喪失したらしい。

「ところではぐれた仲間はどこいったんだ？　どっかであんたを探しているんじゃないか？」

「はぐれた時に私はてっきり下に潜ったと思って進んでしまったんです。仲間の人たちはひょっとして上に戻ったのかもしれません……」

はぐれた時は上に戻るように全員で決めとけよ。危なかっしいなあ。

「で、仲間ってどんなヤツなんだ？　新人から目離すとは面倒見良さそうじゃないな」

「いえ、新人の私も心よく迎えてくれたいい人たちなんですよ。ヨゼフさんとガットさん、ヨゼフさんは細身の剣士で、ガットさんはヒゲの似合う槍を使う戦士で……」

……あっ、やっべ。やっちまった。

オーガと潜ろう４（前書き）

お待たせしました。

オーガと潜ろう４

舐めるように火炎が舞う。熱と光に炙られて、悲鳴を上げながらゴブ・エイプたちが逃げ惑っていく。

乱舞する火炎放射、魔法の中では初心者向けかつ使いやすい魔術「火炎放射撃（フレアガン）」。

魔術によって生成された合成油を着火、高圧で吹き付ける魔術だ。威力はそこそこだが低い練度で扱える上、効果範囲が広いというありがたい代物である。

「あーはっはっははっ！　燃えちゃえ、みぃぃんな燃えちゃえ！　あたしを怖がらせるゴブ・エイプなんて消し炭にしてやるっ！　イィヒヒヒヒヒッ！」

炎に顔を照らされながら、やたら高いテンションで喋りまくるメリル。あれ、このねぇちゃん戦闘中はこんななの？

「なんか、うかつに『ちょっとゴブ・エイプ追い払うの手伝って』なんて言うべきじゃなかったかな……」

引き気味の表情で呟くダイム。また襲ってきた迷宮獣を追い払うの手伝わせたら、こうなってしまった。どうしてこうなった。

「迷宮獣なんてみんな燃やしてやる！　私が隠れてた時に不気味な吠え声でイジメてくる迷宮獣なんてみんな燃やしてやるぅぅぅぅぅッ！」

あ、その吠え声はたぶんダイムだ。もうすでに迷宮獣が逃げたのに、メリルの火炎放射は止まらない。……おい、これじゃすぐ魔力

尽きるぞ？

「と、とりあえずとめましょうよ先輩。このままじゃまずいですって」

えー近寄りたくないなあ。

「しゃあねぇな。おーいメリル！　もう止めろ！」

「死んじゃえ！　私をイジメるヤツはみぃぃんな死んじゃえええッ！　アハハハハッ！」

……もうこいつと同行すんのやだなぁ。

「ほんとすいませんでした！　もう私一人じゃどうなることかと……」

ペコペコと頭を下げるメリル、動く度に赤毛が揺れる。ダイムになだめられてようやく落ち着きを取り戻したようだ。……虚ろな目で「ホントに？　ホントに私をイジメるヤツはもういないの？」といいだした時は本当にその場に置いていきたくなったぞ。

「あ、ああ、まあほらこういう時は助け合いっていうしさ、そ、そうだよなダイム？」

「え？　ま、まあそうですよね先輩。困った時は助け合わないと……」

やっぱアレだよな。メリルの同行者ってこの前の二人組……めんどくさいことになったなぁ。

「でもあの二人はダイムさんもジムさんも見てないんですよね？　狂暴な迷宮獣に襲われてなければいいんですけど……」

「狂暴という意味では当たって……あ痛！」

わき腹にこっそり肘を入れて牽制、黙れダイム。

「え、なにか二人のこと知ってるんですか？　途中で会ったとか」

「いやー悪いが全ッ然、心当たり無いわー。悪いねー」

これ以上めんどくさくなってたまるかボケ。

「……先輩、やっぱり正直にいったほうがいいんじゃ……」

ダイムがメリルに聞こえないよう小声で耳打ちしてくる。

「……たしかあと一時間ぐらいでアイツらが倒れている地点にコボルトのおっさんたちが見回りにくるから、怪我人回収されるのを待てばゴチャゴチャ面倒くさい説明しなくてすむだろ」

腕時計で時刻を確認、行って戻ってくる頃には片付けられてんだろ。

地図を確認、現在十九階。丁度手前に下行きの階段が見えてきた。とっとと荷物届けて帰りたい。

「しかしめんどくさいな。魔王城で管理している非常口（エレベーター）を使えりゃ一発なのに」

魔王城から地下ダンジョンへは、通常の探索ルートの他に各階層をダイレクトにつなぐ非常口（エレベーター）がある。

元々はアウトフロントの建造物を基本はそのまま使用しているわけで、現在の管理者の魔王国がそのアウトフロントの移動装置を管理している。

最も使えるのは魔王軍所属の魔族だけ。一般の冒険者は余程の大金を積まないと使えない。

デッドラインは店内の非常口のみ通勤目的で使用することを許可されている。

超最下層の辺りだと、その非常口さえ繋がってないらしいが。

「魔王城の事務所からＯＫ出なかったそうですからねぇ。やはり地道に歩いていくしかないみたいですよ」

階段に足を踏み入れる。螺旋階段を回りながら、使えない物を期待しても仕方ないと自分に言い聞かせた。

「なんか不公平な気がするんですよねー。私たち冒険者のほとんどは必死に階段上り下りしてダンジョン探索してるのに、魔族はエスカレーターでひとっ飛びなんですよ」

不満を口にしながらも、ローブの端を踏まぬよう慎重に降りるメリル。それでもバランスを崩しかける。なんか見てらんねぇなこのねぇちゃん。

「基本成功の成果は総取りの自由業の冒険者。給料制だが福利厚生のある魔王軍公務員の魔族。そういう違いなんだろ。あんまり冒険

者を客扱いし過ぎてもダンジョン経営しにくいんじゃね」

現在のダンジョンに資源採掘場所としての価値は並程度だ。レアな素材は手に入るが量が少なく、鉄の原料の鉄鉱石、アルミの原料のボーキサイトなど工業を支える採掘資源は他の鉱山から大量に取れる。

冒険者や魔族の成績をポイント制にして酒場などで国営の賭け場であるトトカルチョ、「ダンジョンアンドデイ」通称D&Dを開催。なかなか大きな収益を上げている。

このため上位の冒険者は街ではなかなかの人気者だ。

「そりゃそうですけど、それでも納得いかないっていうか……　はぁ、憧れの上位冒険者（ハイランカー）なってみたいなぁ」

若いのだから夢を持つのは結構だが、まずはあの半狂乱で魔術を連射する癖を治したほうがいいと思う。いやマジで。

「それにしてまずいぶん長いなこの階段。普通より五、六倍はあるぞ」

正直ダンジョンはそれほど深く潜った経験は無い。二十階に行くのも今回が初めてだ。

「あー、私も無いんですよ。今まで十五階あたりでウロウロしてたんで」

「僕は昔父さんに連れられて二十階までいった事あるんですけど」

ダイムがしみじみと昔を振り返っていた。

「なんか二十階ってやたら天井高いんですよね。二十五メートルくらいあるんですよ」

「なんでそんな高いんだよ？」

「それがよくわからないんですよ。建造物の構造体が異常増殖してるもんですから、急に造りが小さかったり大きかったりするなんてよくあることですし」

コツリコツリと足音が狭い空間に響く。下のほうに明かりが見えてきた、そろそろ階段も終わりらしい。

到達した二十階はまたしても壁が乱立する場所だった。半ば迷路になりかけているが一応は階層の中心を目指して突き進む。

「しっかしどこに居やがるんだサイトーって？」

「冒険者か魔族のどっちかなはずなんですけど、さっきから全然誰とも会わないですね先輩」

「私早く終わらせて帰りたいです……」

杖をプラプラと振りながら気怠げに呟くメリル。おい、こいつだんだん態度デカくなってきたぞ。

「そういえば思い出したんですけど……」

「なんだダイム？」

「迷宮獣がやたら気が立ってるって話ししたじゃないですか、それでその原因をたしか前に本で読んでたんですよ」

「今さらそんなん聞いてもなあ」

壁を曲がると更にそびえる壁、壁、壁。気が滅入ってくる。ダイムは俺のぼやきを無視して話を続けた。

「大体は原因は一つなんですよ。下級迷宮獣にとっての脅威がその階層、または近くに現れた場合。下級迷宮獣はそのために逃避や警戒を強めているんです」

オオオォォォォ……

何か、呼吸音のような音が遠くから聞こえてくる気がする。

「……その脅威ってのは、例えばなにになるんだ？」

「そうですね、例えば……」

「あ、なんか大きい広場に出れましたよ！　でもやっぱりだれもいない……あ」

先行していたメリル、壁を曲がった途端に言葉が消えた。

なにか嫌な予感がしつつも俺も壁を曲がる。

急に開けた、高い天井の目立つ空間にそれはいた。

朝焼けのような色の外皮は火山岩を常食することにより、重金属を含む強固な鎧と化す。

その頭部は、鋭い三角錐のシルエットを持つ。突き出た乱杭の牙と後ろへ長く伸びる二対の角は、凶暴さと攻撃性を強く見る者に植え付けた。

背中に生えるコウモリのような羽は、今は畳まれて慎ましく見えるが、広げれば体格の三、四倍の面積に匹敵するだろう。

強靭かつ太ましい四肢には、鋭く長い爪が並ぶ。

そして最も特筆すべきはその巨大さ。尾から頭までは三十メートルを超える。恐らく立てば二十メートル近くまでいくだろう。

それは迷宮の王。理不尽なほどの力の代表者。あらゆる冒険者が恐れ、崇め、憧れる存在。

「……おい、例えば、なんだって？」

メリルと同じように言葉が途切れたダイムへもう一度話かける。それでも彼の視線はそれに繋げられたまま動かない。代わりに、まるで熱病にうなされるように唇が動く。

「……体長をリッケンベル竜成長測定年齢換算方で当てはめると千年期級（レニアム）、竜種は恐らくレッドドラゴン……」

ごくりと唾を呑み込んだ。

「通称（スルト）火神竜と呼ばれるタイプ。年齢的にも超最下級にいるべき最上位迷宮獣です……」

さー、給料に合わない仕事になってきたぞぉ。

オーガと潜ろう5

地響きを立て竜が振り向く。生物種最強の種族が、赤の瞳で俺たちを見据えた。そして口腔から、空気振動が放たれる。

「あ、ひょっとしてデッドラインさん？　サイトーって僕です。よかったぁー、遅かったから心配してたんですよ。ところで判子忘れちゃったんでサインでいいですか？」

齢千年を超えると思えぬ好青年な口調で火神竜（スルト）は明るく声をかける。

「どーもー、まいどデッドラインです。ご利用ありがとうございます！」

サインをもらい、荷物を渡す。仕事が無事に終わった後は気分がいいなぁ。

「早く帰ろうぜ、ダイム。後でコーヒーでもおごってやるからよ」

「え、いいんですか？　ありがとうございます」

「あ、私もいいですか？」

「はっはっはっ、ほんと遠慮しないねぇちゃんだな。ま、いいか」

笑いながら出口を目指す。さあ早く家に帰って寝よう。

――……ぱい。

そうさ、仕事は終わったんだ。竜はもういない。

――……んぱい。

もうあのアホ店長も竜もいない俺の部屋で思う存分寝てやるぞ、わーい。

「――現実逃避はやめてくださいよ先輩！」

ダイムの顔面凶器を見て、俺は現実に引き戻された。

「気持ちはわかりますが、現実から逃げないで下さいよ！」

「うるせーな。わかってるよダイム！」

現状確認。眼前の広場には伏せている火神竜（スルト）＝三匹いれば小国を落とせる戦力。

味方戦力。ヘタレオーガ×1、根性ねじれへぼ魔術師×1、俺×1。

結果予測。絶望の極みウルトラブーストはいきたドーン、さらに倍プッシュ！。

やぁぁってぇられるかッ！

「とりあえず、サイトーが見つからん以上退くぞ！」

「ちょっと待って下さい、火神竜を間近で見るなんてめったにない

んですよ！　もうちょっと……」

「もういやぁぁ！　なんで二十階の低階層にあんなとんでもないのいるんですか！？」

この期におよんで、学術的興味を優先するダイム。マッハで取り乱すメリル。

こいつらまったくパーティーとして機能する気が無い！

「とりあえず、まだ竜が気づいてない内にここは退いて……おいメリル騒ぐな！　気づかれるだろ」

「あー、先輩、それはもう遅いです」

騒ぐメリルを後目に、淡々とするダイム。

「……なんだって？」

「あのレベルの竜は、高精度の探知索敵魔術が常に発動していますから。僕らなんかより探知能力は高いです」

竜の頭部、眼の周辺に光の線が走る。間違いなく探知魔術が作動していた。

「僕らが竜を見ているということは、十中八九、竜もこちらに気づいているでしょう」

でしょう、じゃねぇぇよッ！

オ　オ　オ　オ　オ　オ　ォ　ォ　……

竜の遠吠えが唸る。地響きを上げながら、足がこちらへと動いていく。確実にこっちに気づいてるぞ！

「ちょ、こっち気づいたみたいですよジムさん！」

「見りゃわかるよメリル！」

身を翻し、大急ぎで壁の裏へ退避。竜から逃げなければ。

「あ、ちょっと」

竜へ振り返るダイム。なんだ？　なにする気だ？

「あのー、サイトーさんてあなたですか！」

この後に及んでお前は何を！

しかし、ダイムの言葉に、ピタリと竜が停止。

……えっ、ひょっとしてまじで？

甘い考えが頭をよぎった次の瞬間、竜の口腔が赤く瞬く。

ヒ　ュ　ゴ　ゴ　ッ　！　！

赤火の渦が竜の頭の近くで揺らめいた。明らかな威嚇のための火炎放射魔術（ファイヤブレス）

「このバカ！」

ダイムの襟首を掴んで壁裏へ引きずり込む。肝冷やさせんじゃねぇアホ！

壁裏で座り込む。焦りで息が乱れた。いくらなんでもそれはないわな。

「アレがサイトーなわけないだろ！」

「ひょっとしたらと思ったんですけどねぇ。さっぱり見つからないしもしかしたらと」

「もしいたとしても消し炭になって転がってるか、竜の腹ん中だろ」

「いやああ！　やっぱりみんなここで死ぬんだ！」

だから落ち着けヘボ魔術師。あと杖振り回すな。

騒ぐ彼女を尻目に、竜の行動から推測する。

「まあどうも竜には焼く気は無いみたいだな、やる気ならとっくに超焼炎息吹（ナパーム・ブレス）ぐらい後ろから撃ってるだろ」

竜の魔術の代名詞、息吹（ブレス）魔砲。

息吹、というか口腔から魔術を撃つわけだが、竜の体格と合わせ首の稼働域によりかなり広範囲に撃てる魔術だ。それゆえに回避は難しく専用の防御策が必要になる。狭いダンジョンでは致命的な攻撃だ。

埃を払いながら立ち上がったダイムが賛同する。

「そうですね、千歳越えの火神竜なら最悪、核爆衝撃極炎息吹（ティルト・ウェイト・ブレス）ぐら

い撃てるでしょうし……ということは」

ティルト・ウェイト・ブレス、戦場で魔術師四十人がかりで発動したのを一回だけ見たことがある。魔術により限定空間を作り出し、内部で核爆発を発生、熱と衝撃のみをこちら側へ召喚する戦術級魔術。

十数万度の熱と超衝撃を持つが、そんなもんダンジョンで撃ったら竜も生き埋めになるだろう。

「それでも追っかけてくるってことは……丸焼きより踊り食いが好み、か」

「でしょうね」

「もういやあああっ！　竜に食べられるのも丸焼きもいやあああ！」

だから落ち着けヘボ魔術……

ド　ォ　ン

「ひっ！」

突如、向こう側から衝撃。壁にヒビが入る。中央から、放射状に走る亀裂。

メリルの取り乱しが収まり、悲鳴を上げたままの表情でフリーズ。

「……追ってきてやがるな」

ド　ォ　ン

再度衝撃、地響きに足がすくむ。亀裂が深く広がる。冒険者ならまず避けることが常識の壁も、竜にはただの簡単な破壊対象でしかない。――これが竜か。

「お、おお応戦、応戦しないととと」

震える声で杖を握るメリル。すでに目の焦点が合っていない。

「メリルさん、火神竜にはマグマの中を泳いでいたという報告があります。それほどの熱耐性を持つ以上、メリルさんの魔術では対抗はとても……」

うわぁ、火神竜ってやっぱスゲェなぁ。なんか絶望的過ぎてなんも感じなくなってきたぞぉ。

「しょうがねぇな、――ダイム、荷物降ろしてこの場に置いてけ。そんでメリル担いで入り口まで走れ。俺が時間を稼ぐ」

ダイムがギョッとした顔で俺を見る。メリルはまだ言葉の意味が理解できないようだ。

三度めの衝撃が壁に響く。その音に、黙っていた二人がハッと我を取り戻した。

「先輩、稼ぐって……どうやって!?　いくらなんでも相手は竜ですよ」

「なんとなく思ってたけど……このジムさんってやっぱりどこかおかしい」

やかましいわ。

「逃げてる途中で火を吹かれたらどの道終わり、時間稼ぎは必要だ。たまには年上な所見せてやらんとな。――心配すんな、適当なあたりで切り上げるさ」

ブレスを控えているなら、接近は出来る。腕と脚が届く距離なら、俺の得意分野。

ただし、チャンスは一回限り。仕留めきれず二度目に距離を取られたらブレスがくる。

「ダイム、なんでもいいからとっととメリル担げ！　そのまま出口まで振り向かず走れ！」

「いくらジムさんでも……」

ダイムに浮かぶ逡巡、自分でもかなりマトモではないことを言っているのは理解している。

「なぁに、俺が給料以上の仕事しないやつなのは知ってんだろ？こんな安い仕事で死ねるかよ」

そうだ、死ぬには合わない時給だ。あのクソ店長に文句も言わずに死ねるかよ。

意を決し、ダイムがメリルの腰を掴む。

「え、え、ちょっと」

無言のまま、勢いよく肩にメリルを担ぎ上げ、後ろへ振り向く。

「――絶対、助けを呼んできますから！」

そのまま、脱兎の勢いで走り出した。草食系な気質だが、やはりオーガだ。脚が速い。

――さぁて、

眼前の壁に向き直る。響く轟音、更に深く鋭く隆起する亀裂。
はっきりと感じる、この壁越しに強大な覇者がいる存在感、そして壁が意味をなさなくなっているという予感。
壁が破れるまで、恐らくあと一撃。それだけが見敵までの猶予。

――永いな。

時間が引き延ばされる。戦闘へ己の精神を切り替えることで、時間感覚が伸びる独特の感覚。本来なら僅かな間であろう最後の一撃への時間が、永い。

ゴ

ゆっくりと中心が崩れる。吹き飛ぶ中心から向こう側が見えた。

オ

破壊の衝撃が広がる。円状に走る破壊。柔らかく舞い上がる破片。

ン

そして、赤火をまといて現れる火神竜。

――――――ッッッ！！！

竜は吠えていた、と思う。吠え声を理解するよりも先に、弾けるように突撃。降り注ぐ破片を避けながら、拳の届く距離に竜を捉えるまで、ひたすらに前へ。

「ッ！？」

不意に頭上を飛び越える光球。一直線の弾道で、竜の頭部に突き刺さる。

――メリルか！？

担がれながら放たれた照明魔法の一種、いきなりの目潰しに竜が巨体をきしませのけぞった。遠ざかっていく彼女の声が聞こえた。

「死ね、死に腐れこのバケモノトカゲェェ！」

――ねぇちゃん、意外とやるな。

オーガと潜ろう5（後書き）

試験的次回予告3

「ハァイ、というわけでなんだかお久しぶりでス。『ダンジョンコンビニ』裏の裏の裏の裏の主役の店長でス！」

「……おいそれ結局表だよな？」

「そしてこちらは店長の愛人兼店員のジム君！　もちろんツッコミ役には『夜の』という意味も含まれ……」

「死ねボケ殺すぞ」

「さて挨拶はここまデ。ここからが本題ですヨジム君！
ぇ営ぃ業ぉぉぉ戦略ぅぅぅぅ――――ッ！（棒）」

「今度はそのネタか、ていうか（棒）まで発音するんじゃねぇよ！」

「きっと、何者にもなれないジム君に告げル。
売上を三倍にしテ！」

「いや何者っていうか俺コンビニ店員だから、それ以前にリアルな無茶をいうな！」

「……ふと思ったんですが、あれって例の日記帳じゃなくて未来日記のほうの日記渡したらどうなるんですかネ？」

「無謀なクロスオーバーはお前の脳内だけに留めろ！」

「まあそれはそれとしテ、近頃なろうでは迷宮がブームですよネ」

「またメタな事話し出すなお前。ていうかそのブームもう遅いよ」

「そこでですネ、そういった作品のダンジョンを無断で間借りしテ、チェーン店を開いて店舗増産、売上アップ計画を……」

「止めろよ！　絶対止めろよ！　お前それやったら色んな所から洒落にならんほど怒られるからな！」

「まあそこまでは冗談ですヨ。なにか良く売れそうな商品でも並べますかネ。
魔王さん向けにＢＬ本強化したりとか、あ、薬品カテゴリーだけどある薬品とある薬品を混ぜると爆弾になる商品とかどうでしょウ？
扱いは武器じゃないから売れますヨ！」

「……また魔王さんに怒鳴りこまれますよ？　ていうか、さっきから気になってるんですけど、その小脇に抱えてるペンギンのぬいぐるみなんすか？」

「え、やだなぁジム君。さっきまでの会話ネタからわかるでしょ？
今一番ホットなペンギンキャラクター、その名もプリニ……」

「もう黙れお前ぇぇ！」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5743u/

ダンジョンコンビニ　デッドライン　魔王城《ラスダン》店にようこそ！

2011年10月15日01時42分発行